

全校群読

2023.7.10

今年度のスローガンを「声を届けよう」とした。昨年度の修了式の日、このスローガンについて生徒に説明をした。早速、その場で声を出してみることにした。「群読」をやってみることにした。問題は、群読の題材である。国語の授業や文化祭とは違う。時間にも制約がある。もともとは、校長式辞のコーナーである。そんなに時間はとれない。

いろいろと考えた結果、詩を使うことにした。短すぎず、長すぎず、パートに分けることができるもの、生徒が知らないもの、詩の意味をじっくりと考えさせることができるものを探した。いくつかの候補から残ったのが、相田みつをの『いのちの根』である。相田みつをは知っていても、この詩は知らないだろうと考えた。昔、国語の授業で扱ったことがあり、こちらとしては準備がしやすい。

本当は、生徒に、どのような群読を行うのか、群読プラン、群読台本を考えさせることも、群読の大事な学習である。今回は、そこまでの余裕はないため、こちらで群読台本をつくり、生徒に配布するようにした。

まずは、私が一度読む。読み方の確認である。次に、全員で声を合わせて読む。その次に、台本にしたがって読んだ。1年生が読むところ、2年生が読むところ、男子が読むところ、女子が読むところ、全員が読むところに分けた。1年生は元気がいいが、2年生はというと、声が小さい。全員がマスクをしている。コロナの影響で、広い体育館のような場所では、ずっと声を出していない。

2年生が声が小さいからと言って、もっと声を出すようにとは言わない。それでは、指導にはならない。「今度は、お互いに声を響かせましょう」とだけ言った。そして、もう一度、台本にしたがって声を出した。このときに、生徒が声を出して群読をしたのは、たったの3回である。来年度は、「声を届けよう」がスローガンであることをわかってもらえればよい。授業中の声が小さいのである。急に群読をやったからといって、そううまくいくものでもない。

うまくいけば、4月7日の新入生オリエンテーションのときに、1年生の前で『いのちの根』の群読を披露しようと目論んでいた。だが、断念した。そもそも全員がマスクをしており、大きな声を出すことに、まだまだ抵抗感をもっていると判断した。案の定、4月になっても、マスクをはずす生徒はいなかった。私の「全校群読」の企ては頓挫した。読みがあまかった。

5月後半くらいから、マスクをはずす生徒が出てきた。全校群読は、全校集会や終業式でもできる。まだあきらめてはいない。合唱以外でも、お互いの声が響き合う経験をさせたい。合唱朗読である群読はいいと思うのだが。